



発行日 2000年1月30日

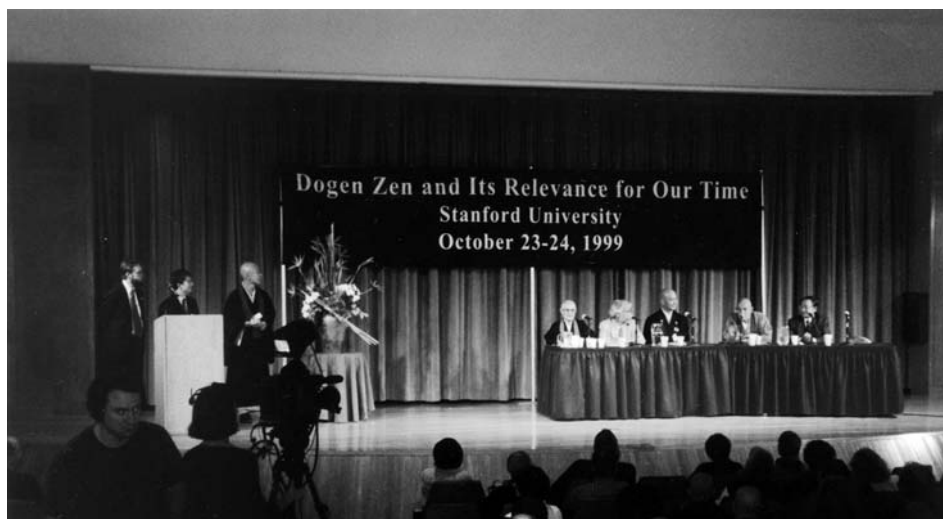
発行人 藤川享胤 編集責任者 福島伸悦 編集委員 秋 央文・館盛寛行

発行所 SOTO禅インターナショナル事務局 〒164-0002 東京都中野区上高田1-27-6

Tel. 03-3361-0614 Fax. 03-3361-0634 URL: http://www.pa.airnet.ne.jp/szi

郵便振替 00100-6-611195 SOTO禅インターナショナル

Vol.16



スタンフォード大学クレスギー公会堂  
道元禅師シンポジウム

## CONTENTS

- 巻頭『道元禅師シンポジウムを終えて』……………北アメリカ開教総監 秋葉玄吾…… 1
- 特集／道元禅師シンポジウム
- 道元禅師シンポジウム回顧録……………千葉県 満蔵寺副住職 森田英仁…… 2
- もう一つの「道元禅師シンポジウム」……………SZI事務局 秋 央文…… 4
- 道元禅師学会 in スタンフォード & スタンフォード大学仏教学研究所とは
- スタンフォード大学仏教学研究所内 橋本英樹…… 3
- スタディーツアー参加者の声「道元禅師シンポジウムに参加して」…………… 5
- 写真交換会・懇親会 再会の喜びとともに…………… 7
- ハワイレポート ワヒアワ龍仙寺95周年記念法要……………ハワイ開教師 大谷有為…… 8
- SZI通信
- パイオニア・ヴァレー禅堂紹介「大学坐禅会のこと」……………ヴァレー禅堂堂頭 藤田一照…… 10
- ゆめ観音 in 大船…………… 11
- ドイツ大悲山普門寺だより……………堂頭 中川正壽…… 11
- SZI 動静報告…………… 11
- 会費納入者・寄付者リスト…………… 12

## 巻 頭

## 道元禅師シンポジウムを終えて

北アメリカ開教総監 秋 葉 玄 吾



世の中に真の人やなかるらん 限りも見えぬ大空の色(傘松道詠)

この度、カリフォルニア州スタンフォードにおいて「道元禅師ご生誕800年記念慶讃シンポジウム」

が「Dogen Zen and Its Relevance For Our Time」のタイトルのもと、10月23日、24日の2日間にわたり、海外ではじめての宗門あげての行事として挙行されました。

日本より、宗務庁からは大竹明彦総長、吉田公雄教化部長、永平寺から南沢道人監院、山田康夫遠忌局長、總持寺より長谷川文丈後堂の各御老師方をはじめ、ご生誕慶讃行事関係各御尊宿、SZI協力各師、スタッフ、一般参加者の各師、また、道元フォーラム委員の青木利夫氏など、僧俗50名を越える皆様方が海を越えておいでいただきました。

会場となった600名を収容するクレスギー公会堂は、アメリカの曹洞宗系禅僧、学者、修行者、開教師、禅センターサンガのメンバー、学生、一般人と、そして日

本よりの皆様方が席を占め、道元禅師様の法の輪が大きく描かれました。

道元禅師様は「仏祖」巻で述べておられます。「まさに仏祖の面目を保任せるを拈じて、礼拝し相見す。仏祖の功德を現挙せしめて住持しきたり、体証しきたれり」と。過去、現在、未来のいつの時代にも、いずれの国にも、宇宙の無限の過去から実在した原理を、釈尊と同じように只管打坐を通して修行、求道する「祖師」は断続しないとお示しです。

今回のシンポジウムは21世紀の未来にも、兄たる日本の曹洞宗と弟たるアメリカの道元禅と協同し「仏法」のその輪を新しく組み立てるべきであると教え、伴にその作業が出来ることを示し、その法輪を力を合わせ転じていけると語っておりました。

限りも見えぬ大空のもと、この広大なアメリカの大地の上を正法輪が転ぜられていく梵音が無限に聞こえてくるような気がいたします。唯仏与仏と。最後に関係された皆様に深謝いたします。

## 道元禅師シンポジウム回顧録

千葉県 満蔵寺副住職 森田 英 仁

既にシンポジウムから2ヶ月余り経過し、その報告は、駒澤大学の奈良先生は産経新聞に、宗教考現学研究所所長の此経先生は仏教タイムスに、SZIの浅井師は中外日報に、海外開教審議会の細川師は曹洞宗報に、そして永平寺傘松会は12月号の特集にと、既に出揃った感がある。様々な人々によって様々な形で報告されているとはいえ、概ね成功の評価がなされていることは、スタッフの一人として存外の喜びである。思えば一昨年永平寺から米国に派遣して頂いた時には、全く輪郭の見えなかったアメリカのZENと日本の禅とを結ぶ糸が、ほんの僅かながらその輪郭を垣間見せてくれたような今回のシンポジウムであった。

当日、会場にはかつてビート禅と呼ばれた時代に禅に傾倒し、出家を志した人々が、アメリカの禅の歴史から説き起こされた発表に、自らの来し方をオーバーラップしている姿を見るにつけて、私はアメリカのZENの成熟と安定を見るような心持ちに浸っていた。しかしふと我に返ってみると、スタンフォード大学という場所の割に若者の姿が少ないような感じもする。と同時に、それは一昨年の米国派遣での特異な経験と結びついた。シンポジウムの発表の中に、長年アメリカ人と共に坐ってきた経験によれば、日本の僧堂における形式主義がアメリカへの禅の伝播の大きな障害となっていたというものがあった。もちろんビート禅と呼ばれた時代と今とでは社会的状況も全く違うし、仏教そのものの認知のされ方も今は格段に進歩している。しかし同じ形式主義といっても、アメリカにおける近年のチベット密教やテラバーダの飛躍的發展は、アメリカ人が必ずしも形式主義を否定していないような気がする。むしろ形式主義そのもののの中に潜む自由に対して提言がなさ



日米関係者記念写真 図書館前にて

れないことが問題なのではなかろうか。本シンポジウムの課題である道元禅の現代性を世に問う場合、この形式主義をどこまで受け入れ、拡大適用してゆくかということは、避けて通れない問題であろう。なぜなら道元禅が、坐禅、聞法、普請作務を基盤とする僧堂生活によって、仏のいのちを生きる行仏をその根幹に据えているからである。道元禅はこの形式主義の制限があって初めて自由足りえるのである。檀家制度に支えられた日本の寺院のように、仏教の伝統的基盤を持たないアメリカの僧侶や禅センターにとって、この道元禅の自由さを考慮しながら自活の道や仏教者としての理想実現への道を模索しているとすれば、その意味ではまだまだ成熟と安定とは言えないのかもしれない。しかし翻って考えてみると、はたしてこれはアメリカの禅にのみ課された課題であろうか。僧侶の多くが叢林を離れ、それぞれのお寺で生活している現在の日本の状況も、実はそこでこの処し方の問題としてアメリカのZENが直面しているものと同じ課題を突きつけられているのではないだろうか。

今回、道元禅の現代的意義のひとつとして「参加の徳」が、カール・ビュールフフェルト教授によって提言された。国や時代や社会的状況の違いを乗り越え、道元禅をその根幹から大きく逸脱することなく、如何に現代に生かしてゆくべきか。その問題に対する共通のスタートラインに立ったことを確認し合えただけでも、このシンポジウムは意義あるものであったと確信している。その意味で、独り立ちしようとしているアメリカの禅と対等のパートナーシップを結び、互いを鏡としつつ、発展してゆくことを心から願うものである。



事前スタッフミーティング風景

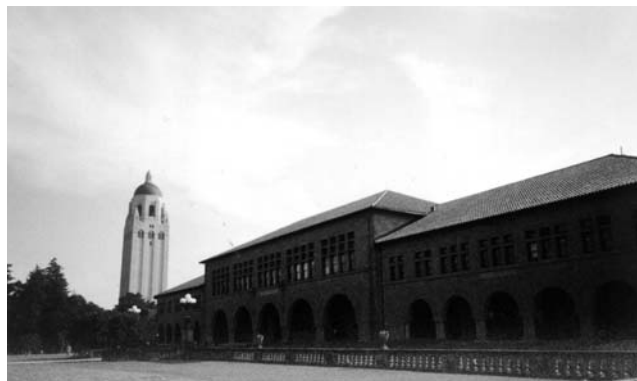
## もう一つの「道元禅師シンポジウム」

SZI事務局 秋 央 文

今回も我々SZIは、道元禅師ご生誕800年記念慶讃行事の一環で催される「道元禅師シンポジウム」研修ツアーを企画させて頂いた。そこに「道元禅師」と「海外」というキーワードがある限り、我々SZIがそれに触手を伸ばさぬ訳がなからう！！ ツアー参加者がそれらキーワードに触れて頂く事により、国境という枠を超えた道元禅師理解を一層深めてくれれば、我々にとってもこの上ない幸せである。今回は「道元禅師シンポジウム」特集号という事もあり、私の方からはもう一つの「道元禅師シンポジウム」をレポートさせて頂きたいと思う。

今回のツアーもある程度の趣向を凝らし、あくまでも「研修」が前提となるサンフランシスコ市内観光をその中に取り入れた。一口に「市内観光」といっても、一般旅行業者が企画するツアーコースと遜色なければ面白味に欠けると言えよう。「海外」に関しては一家言（！？）持つSZIが企画した今回のツアーコースとは、ずばりっ… サンフランシスコのお寺巡り！！ であった。これまたワンパターンと批判を頂戴しそうであるが、ツアー参加者の中にはこれから本山での修行を控える若き青年僧侶もおられるとの事。このアメリカにおけるお寺巡りが、彼らの後々の財産となる様、細心の心配りと展待の精神を以てツアーコースは企画されたのである。

今回はサンフランシスコ市内にある日系開教寺院の桑港寺、同じく現地の方々を対象に門戸を開く禅センターをそれぞれ拝登した。到着してすぐシンポジウム関係者と共に拝登諷経、並びに今回のシンポジウム無事円成を祈願しての祝祷諷経を執り行い、このツアーが単なる「観光」ではなく「研修」である事を参加者の方々に自覚して頂いた。そこにも法式や様式の違いこそあれ、日本とアメリカという国境の枠を超えた道元禅師の仏法が息吹いていた事は言うまでもない。我々は道場見学や茶話会などを通



スタンフォード大学

して現地の方々と親睦交流を深め、その足でシンポジウム開催地であるスタンフォードに向ったのである。

スタンフォード大学は日本でも馴染みの深い半導体産業都市・シリコンバレー近郊に位置する全米屈指の伝統私学である。大学に近付くにつれフリーウェーの側道には「Marlboro」や「CAMEL」よりも「Microsoft」や「Macintosh」の看板が目立つようになってきた。大学の概要自体についてはバスの中で一通り説明があったが、個人的には大学OBのタイガー・ウッズや現在就学中のクリントン大統領の愛娘・切尔西の話よりも、あの大手コンピューター企業・「SUN」の企業名が「Stanford University Network Station,」の略だと聞かされた時の方がはるかに驚きが大きかった。スタンフォード大学における工学博士号取得者は全米でもトップクラスだと言うし、アメリカにおけるコンピューター頭脳がこの地に終結している事を思うと、昨今世間を騒がすY2K・コンピューター西暦2000年問題もこの地には無縁なのかな、と少し羨ましくも思ったりした。

まあ今回我々はコンピューターやインターネットの研修が目的でこの地を訪れた訳ではない。その電子工学の最先端に行く情報産業都市と、「慕古」を大遠忌のスローガンに掲げる道元禅師の仏法の接点を模索しつつ、我々は明日からのシンポジウムに胸躍らせる（！？）のであった。

何やかんや話を進めるうちに私に与えられた紙面も残り僅かになってしまいました。本当はツアーの概要ばかりでなく、シンポジウムの内容自体についてもレポートさせて頂きたかったのですが、今回の私の役目はもう一つの「道元禅師シンポジウム」をレポートする事…。今回はこのへんでお役御免とさせて頂きます。



サンフランシスコ桑港寺にて



## 道元禅師学会 in スタンフォード

スタンフォード大学仏教学研究室内 橋本英樹

この度「道元禅師学会」がスタンフォード大学仏教学研究室内、並びに曹洞宗の共催のもと実施された。これは前日の「道元禅師シンポジウム」に引き続いて当大学を会場に道元禅師ご生誕800年を慶讃しての特に研究者間による学術会議であった。この記念すべき学会には全米から、今日、日本仏教学を代表するトップクラスの専門家が一堂に会し、発表者に限っても17名の参加があった。そのほとんどは曹洞宗学の研究者であったが、その他の専攻分野からの出席者もあった。他分野からの曹洞宗学に関する批評もまた示唆に富み、当学会に有益な提言を頂いた。その発表と討論は、アメリカ人研究者間にとっての曹洞禅に関する本質的重要課題を包含しての議論が交わされ、正に活況を呈したものであった。

発表内容は以下の通りである。

グリフィス・フォーク氏は『永平清規』成立史について。

ラリー・グロス氏は、円山道白における法系論争の優位性について。

ディビット・リッグ氏は、看話禅受容の手法と過渡的側面の批判について。

ダンカン・ウィリアムス氏は、江戸期に曹洞宗が取



道元禅師学会

り入れた薬剤の製造、販売、配給について。

ウィリアム・ポディフォード氏は、道元禅師記念行事について。

ジョン・ロブレグリオ氏は、現代における修証義編纂史について。

ジム・ケラー氏は、北海道開拓事業及びアジアにおける戦前の曹洞宗門の役割について。

いずれの発表も興味深いものばかりで、常時、高度な議論が交わされた。学会終了後の代表者一同の見解として、本学会は道元禅師ご生誕記念行事の一環に相応しい、意義あるものであったことが確認された。

## スタンフォード大学仏教学研究室内とは…

スタンフォード大学に仏教学研究室内が設立されたのは、2年前の1997年であり、発足してまだ間もないと言えるでしょう。人文科学研究科の東アジア研究所の一出先機関として開設されたのが始まりでした。特に宗教学部のカール・ビルフェルト、ベルナル・フォル両教授の指導の下、仏教学研究推進のために運営されています。

ここで主なカリキュラムについて紹介いたしましょう。スタンフォード大学はクォーター制であり、10週間で講義の内容は変わり、また毎年異なる授業を受けることが出来るようになっております。この秋の学期は「アジア宗教史一般」「道教入門」「ガンジーと非暴力」「大乘仏教（特にインド・中国・日本における『法華経』の受容を中心として）」「中国哲学史」「禅仏教美術」等々が行われました。また、冬から春にかけての学期中には「中国仏教史」「日本仏教史」「仏籍講読」「インド宗教史」「仏教入門」「中国宗教入門」「禅宗史（インド・中国・日本編）」「初期

の道教史」「仏教人物史」等々が予定されています。また課外ゼミとして『法華経』『大慧書』『正法眼蔵』の各輪読会があり、アメリカの大学としてはかなり充実していると言えるでしょう。

当研究所の所長であるカール・ビルフェルト、ベルナル・フォル両教授は著名な禅学研究者であり、いずれも曹洞宗学に造詣が深く、その業績は米国内外で高く評価されています。先の道元禅師ご生誕800年を慶讃しての「道元禅師シンポジウム・カンファレンス」が当大学を会場にして実施されたことは奇しくも仏縁によるお導きではなかったでしょうか。

また、来年4月からは駒澤大学の石井清純助教授が在外研究員として当地に留学を予定されています。さらに来年秋からはインド哲学の権威、UCLAのグレゴリー・スコーベン教授のスタンフォード大学移籍が決定しており、今後、当研究所は総合的な仏教学研究の場として発展していくものと思われます。

## 道元禅師シンポジウム in スタンフォード

### スタディーツアー参加者の声



スタディーツアー参加者 ゴールデンゲートブリッジにて

道元禅師シンポジウムには、SZI企画スタディーツアーの参加者17名も同行いたしました。同ツアーは1999年10月21日～26日の6日間で実施され、サンフランシスコ市内観光、桑港寺・北アメリカ開教センター・サンフランシスコ禅センター拝登、スタンフォード大学、同大学内美術館などを見学させていただきました。初日の夕食は、日本からのすべての参加者が和食レストランYoshi'sに集まり親睦を深め合いました。また、2日目の夕食は、今回のシンポジウムの関係者が世界中から集まり、Cantor Arts Centerにて懇談会が催されました。日本のみならず、諸外国の仏教者・研究者の方々と直接お話する機会をもてたことは、ただただ仏縁に感謝するのみです。シンポジウムでは、同ツアー参加者の秋央文師、太田賢孝師が諸外国の仏教者・研究者とともに、積極的に質問をする場面も見ることができました。同ツアーは20代から70代までという世代を越えたものであり、また、それぞれの立場で道元禅師を慕う方々が集まりました。6日間という限られた日程でしたが、それぞれが貴重な体験と感動を胸に、無事帰国することができたことを、道元禅師、またシンポジウム関係方々、ツアー主催のJTBの方々、そしてツアー参加者に感謝いたします。

SZI企画スタディーツアーの参加者は以下の通りです。

金田諦典(宮城県通大寺)・石井清純(駒澤大学助教授)・角田泰隆(駒澤大学助教授)・佐藤昭次郎(東京都)・金木文雄(神奈川県)・杉山宗和(秋田県龍門寺内)・栃堀真英・久子(神奈川県浄心寺)・金子宗元・裕子(曹洞宗総合研究センター研究員)・菅原研洲(駒澤大

学大学院生)・太田賢孝(東京都大龍寺、駒澤大学生)・猪苗代昭順(宮城県)・館盛寛行(神奈川県梅宗寺内、SZI事務局員)・秋央文(福島県昌建寺、SZI事務局員)・飯島尚之(東京都宗清寺、SZI事務局長)  
敬称略・順不同

今回はスタディーツアーを代表して栃堀真英師、菅原研洲師の2名の同ツアーに関する声をご紹介しますと思います。(責任編集：SZI事務局 館盛寛行)

### 道元禅師シンポジウムに参加して

栃 堀 真 英  
(神奈川県 浄心寺)

“道元禅師を行じている米国の人々の眼は落ちつきにはらみ澄んでいた”これがシンポジウム会場での第一印象でした。

2日間という限られた短い期間でありましたが、内容を聞き漏らさないようにと筆記した枚数は30枚にもなりました。今、そのノートをめくりながらスタンフォード大クレスギーセンターでのシンポジウムのことを思い浮かべています。

道元禅師誕生後800年を経て、禅師の教えが7千キロの太平洋を渡り異国の地、米国で脈々と行じられていることに、天隅の彼方で禅師は何と想っていらっしゃるのでしょうか。

シンポジウムの中で米国の発表者から、「純粹禅としての道元禅」「釈尊正伝の道元禅」等、道元禅の偉大さは、純粹の仏法の実践にあることが述べられま



道元禅師シンポジウム参加者と共に

したが、シンポジウムの前日、サンフランシスコの桑港寺、サンフランシスコ禅センターに拝登させていただき、法堂、禅堂等随所に簡素、質素さの中に純粋な道元禅が行じられている様子や、今日までの開教師の方々のご苦勞を垣間見ること、宗門の一人として、ただ、ただ、合掌の感激の極みの思いで参拝した前日のことが思い浮かびました。

今、米国では宗教体験としての道元禅師の坐禅が日本国内にも増して純粋に行じられており、シンポジウム会場の400名を越える参加者も“道元禅によって安心を得ている”といった感じのする禅者ばかりのように感じました。

自分自身、現在住職をしながら、青少年に関わる仕事をしていますが、現代の日本の子ども達は物質的には恵まれています「生きる力」や「生きる意味」を見いだすことができなくて苦悩しています。

問題行動や非行をする少年と関わっていますと、「人間として苦勞までしてなぜ生きなければならないのか。」など、人間の根幹である“生きる”といった、心の問題を中心とした宗教的な話ばかりなのです。

しかし、そうした子ども達のカウンセラーは宗教者だけでなく、教師や臨床心理士等によって担われている現実があります。

現代日本は青少年のみならず、大人も宗教を通して生きる意味を知ることが必要になっています。

日本人は口にはしませんが「宗教的心のやすらぎ」を今、本当に求めているのではないのでしょうか。「今日的宗教としての道元禅の必要性」について、日頃から強く感じておりましたことが、今回のシンポジウム参加の私の目的でありました。

そうした意味からも、今回のシンポジウムで米国側の発表者として、友人の死から無常を感じ、開教師を通して道元禅にふれ、仏教者として今日まで生きていることを述べられたサンフランシスコ禅センターのハートマン師、スタンフォード大のビルフェルト教授の偉大な東洋思想としての正法眼蔵の参究発表が、“宗教としての道元禅の実践”として印象深く心に刻まれています。合掌



サンフランシスコ禅センターにて



禅センター坐禅堂と雲水

## 道元禅師シンポジウムに参加して

菅原 研洲

(駒澤大学大学院仏教学専攻修士課程1年)

今回の道元禅師シンポジウム・ツアーでは、道元禅師の研究をしているのは駒澤大学のみという私の常識が崩れるのと、アメリカ人が「正法眼蔵」を読んでいるという新たな常識を突きつけられ、アメリカに行く前に既に二重の衝撃がありました。また、後にアメリカ本土に曹洞宗寺院があるということ、そしてアメリカでも日本の僧堂のように修行が行われていることを知りました。日本を出る頃には私の興味は「桑港寺」「禅センター」とそこで修行している雲水さんに向いていました。

アメリカに到着し、今回の旅行の目的の一つであった「彼方に広がる地平線」を見て、まず満足しました。「桑港寺」はビルの中にありましたが、中に入るとやはりお寺でした。文化も習慣も風土も違うアメリカに日本と同じようにお寺がある。私は「桑港寺」に一步踏み入れると心からそう感じ、嬉しくなりました。

2日目の「サンフランシスコ禅センター」は今、アメリカに根付こうとしている曹洞禅そのものでした。外見は完全にビルディング。でも中には法堂もあり、僧堂（坐禅堂）もあります。日本の美意識にはとても合致しなかったけれども、禅は伽藍ではなく人の心。私は正直、この姿の方が有り難かったです。道元禅師は「大仏寺語録（永平廣録）」（二-128）上堂において「叢林の大小は伽藍の大きさではなくそこで修行する人の心次第である」と説いておられます。日本から来た客人に丁寧に合唱低頭をする雲水さんのお姿を拝見したとき、私はこの道元禅師のお言葉に嘘偽りはないと確信しました。そしてこの「禅センター」の更なる興隆を願わずにはいられませんでした。私がアメリカへ行った目的はこうして達成されていきました。

3日目からはスタンフォード大での「道元禅師シンポジウム」です。第1日目はまず、大谷哲夫先生の「道元禅師の法を嗣ぐこと」でした。仏法における嗣法というものを過去の禅者において最も重視しておられたであろう道元禅師の嗣法観を「正法眼蔵」嗣書巻等を中心に



述べられました。禅師が嗣書を拝覧してどれほどの感動を受けたのか、そもそも嗣書とは何なのか、そして道元禅師以降の曹洞宗において嗣法・嗣書がどのように扱われたかを簡潔に述べられたものでした。現代、僧侶となり一寺の住職になる者は必ず嗣法を受けなければなりません。嗣法とは我々僧侶には避けては通れない問題です。これはアメリカで修行される方々にも大いに興味があることであり、それを正面から扱った先生の論文が今後のアメリカでどのように議論されるのか関心を持って見ていきたいです。

4日目シンポジウム第2日目。奈良先生を初めとして色々な方の発表が行なわれました。その中で最も衝撃を受けた発表は、元サンフランシスコ禅センターの堂頭であった宗純・メル・ワイツマン老師の発表でした。今回の旅行の真の目的はこの発表を聞きに行くことだったのかもしれません。それは老師自身どのように嗣法を受けた



道元禅師シンポジウム



太田賢孝師 質問

のか、そしてアメリカの嗣法の実態を簡単に説明してくださいました。私はその言葉を聞いたとき「アメリカに正しい嗣法（正嗣法）がある」と確信しました。私は嗣法を研究する一学生ですが、そんな私に老師の言葉は大変なインスピレーションを与えてくれました。その後ワイツマン老師と直接話す機会を得て、老師の口から語られる嗣法観に本当に衝撃を受けました。老師はこう申されました。「師とは法（仏法）である」「師と弟子は connect である」と。私は今まで何人かの人に「師（正師）とは何か?」「嗣法とは何か?」と訊ねてきましたが、ここまで自分の言葉で話してくれた人はいませんでした。この老師の言われたことは私の一生の宝となるでしょう。

今回は色々な機縁を得た旅行でしたが、大谷先生・本師菅原敬洲老師また、ワイツマン老師には特に感謝しております。また、SZIの皆さまには心より感謝しております。研洲合掌

## 再会の喜びとともに 写真交換会・懇親会

1999年12月5日（日）午後6時より、銀座クルーズクルーズにて、道元禅師シンポジウム・スタディー



銀座クルーズクルーズにて

ツアーの参加者とSZIの役員による写真交換会及び懇親会が開催され、20名ほどの参加を頂きました。当日は藤川会長のあいさつ、宮城県通大寺の金田諦典老師の乾杯により会が進められました。懇親会では改めて自己紹介とシンポジウムの感想を頂き、また、お互いに持ち寄った写真を見ながら、旅の思い出を共に語り合いました。アメリカにおける活動を自分の眼で見て、肌で感じるにより、スタディーツアー参加者のほとんどの人が海外に興味や関心を抱いて頂けたこと、また、SZIの活動にご理解を頂けたことは、大変喜ばしく思います。改めて感謝申し上げます。

（SZI事務局 館盛寛行）

## ハワイレポート

## ワヒアワ龍仙寺95周年記念法要

## \* \* \* \* \* Wahiawa Ryusenji 95th Anniversary \* \* \* \* \*



ハワイ開教師（マウイ満徳寺）

S Z I 事務局 大谷有為



去る1999年10月31日、ハワイ州・オアフ島、ハワイアン・リージェントホテル（ワイキキ）にてワヒアワ龍仙寺95周年の記念法要が厳修されました。

当日は、ハワイ開教総監町田時保師の導師のもと、95周年慶讃法要が行われ、約400人もの方々が、ハワイ全島、日本、アメリカ本土などから参集しました。法要後は、数々のエンターテインメントが盛り込まれた祝賀昼食会が盛大に催されました。

\* \* \* \* \*

龍仙寺の創立は、今から95年前の1904年、現在のワヒアワ（オアフ島中央）とは場所を異にしたカワイロア（オアフ島北部）曹洞宗布教所にさかのぼります。そして、その軌跡はハワイ砂糖産業の軌跡といっても過言ではありません。

19世紀後半から、20世紀前半の砂糖産業はハワイでは最も利益を得ることのできる産業であったため、新たな多くの労働者が必要とされ、またそれは砂糖の生産を拡大していくためには、必要不可欠のことでありました。日本からもハワイへの多くの移民がなされ、幾つものプランテーションキャンプがつくられていきました。カワイロアもそうしたキャンプのひとつだったのです。現地でも働く人々の数が増え、次第に家族も形成されていくようになり、多くの人々の支持のもとカワイロア曹洞宗布教所が開設されたのは、1904年7月のことでした。

初代（開山）開教師平井隆機師の指導のもと、布教所は活動を始めました。そして、平井師のたゆまぬ努力と熱意は、地元の耕地主をも動かし、寺院と日本語学



Kawairoa Ryusenji 1976

校を建設するための土地や材料を寄付されるまでに至ったのです。幾多の困難を克服し、カワイロアのキャンプの人々を勇気づけ、精神的な支えとなりながら、日本に帰国するまでの約11年間、平井師の献身的な活動は続きました。

龍仙寺の建立を待ち望んだ最初のメンバーは日系1世の方々でした。彼らの砂糖キビ畑での労働は1日10時間、1ヶ月にして26日にも及びました。龍仙寺が建立されたことにより、やっと彼らは、日本を離れてからずっと聞くことのできなかった慣れ親しんだお寺の鐘の音を聞くことができたのです。さらに法要や葬式、結婚式といった儀式、その他数々の行持を行っていくことができたのです。こういったことが、彼らに安らぎを与え、また、過酷な労働を続け、それに耐える決意を与えたのです。

1世の子供たち、すなわち2世日系人は、その成長期に、日本とは異なる文化、風習、価値観、宗教観、また、学校内と家庭内とでの異なる教育・コミュニケーション・環境といった数々の当惑の中に身を置くことを余儀なくされました。家庭内で重んじられる日本的な謙虚さ、つつましさ、礼儀正しさは、学校で学ぶ率直で遠慮のない、個々を重んじる個人主義的な考え方とは相反するものだったのです。このことは、学校では成功して出世することを学ばされる一方、逆に家庭では無言の内に彼らは両親と同じように畑で労働することを促されていたということを意味していました。そして、彼らの多くは、両親と同じ畑仕事に就き、畑仕事には必要ないという理由から教育も8年間で限度とされたのです。しかし、このような環境下にあっても、彼らは龍仙寺の日本語学校に通い、教育を受けることを望みました。ここでも、龍仙寺はメンバーにとって、実質的に重要な役割を担うとともに、精神的な支えでもあり続け



95th Anniversary Celebration Service





Wahiawa Ryusenji

たのです。その後も、数多くの開教師が赴任され、メンバーの方々とともに龍仙寺の基礎を築いてきました。

1933年には、海雲山龍潜寺の山寺号が下付されました。(1975年に龍潜寺の潜を仙に改定。)

また、1965年には、前ハワイ開教総監・松浦玉英師が第10代開教師として着任されました。この時に、龍仙寺はカワイロアから現在のワヒアワへ移転されることになったのです。松浦師は新敷地購入のための資金の調達、日本語学校、開教師住宅、本堂、大講堂の建設等到大変尽力されました。

そして、その後を受け継ぎ、現在、第11代開教師である駒形宗彦師がハワイ島コナ大福寺から、転任されたのは1981年のことでした。

龍仙寺の創立から、今回この95周年をむかえるまでの歴史において、開教師の努力と同様に不可欠であったものは、メンバーの支援・援助です。龍仙寺の存在は彼らにとって、支えであり、欠かすことのできないものでありました。また逆に、メンバーの多大な労力によって龍仙寺は護持されてきたのです。

そして、いつでもその根底に存在していたものは、開教師とメンバーの協調・和合なのです。それは、もちろん開教師だけでも、メンバーだけでも作り上げることのできない、相互協力によるものなのです。

\* \* \* \* \*

今回のこの記念法要で、とても印象的だったことは、新しい時代と古い時代を結ぶために、お寺に若い世代

を集わせ、一世の心と祖国の文化を継承するために、駒形師、そして、駒形フェイさん（駒形師夫人）が心血を注ぎ育てた3～4世の若い世代の人々が、所々で儀式をもちたて、裏方として祝賀の式を支えていたことです。

これは、法要と祝賀の式を、長い時間を懸けて細部に心配りをし、また、ハワイでの文化や言語の違い、世代の違いといった数々のギャップを超える、よいチャンスにしようと願う、駒形師の精進の結集であるのです。

特に、彼らが中心となった太鼓グループの演奏は、歴史の重みと感謝の念を太鼓に込めて奉納し、さらに、これからの龍仙寺を背負って立つという意気のみなざるものでありました。

最後に、私は、この法要に随喜させていただき、多くの龍仙寺のメンバーの方の笑顔にふれることができました。その笑顔は、自分たちがこれまでに作り上げてきた過去の歴史を賞賛するだけのものではなく、来るべき次世代にも向けられているということを実感することができました。

なぜなら、彼らはプランテーションの時代は過ぎ去ったけれども、現代社会そしていつの時代においても、多くの人が龍仙寺を必要としているということ、龍仙寺に対する信仰は失われないということを確認し、さらに、龍仙寺のこれからの繁栄と発展を考えたときに、多種多様な民族の需要に応え、適応していかななくてはならないということを実感しているからに他ならないのです。

#### (参考)

The history of Ryusenji Soto Mission

by Dr. Lawrence S. Wakui

History of Hawaii SOTO-SHU 1903-1978

by Bishop's Office of Hawaii Soto Mission



Former Bishop and Mrs. Gyokuei Matsuura



Rev. Shugen Komagata

## パイオニアヴァレー禅堂紹介 大学坐禅会のこと(中)

マサチューセッツ州 ヴァレー禅堂堂頭 藤田 一 照

今回は私が関わっている3つの大学での坐禅会の概要を紹介させていただきました。どの会でも、坐禅のあと毎回、参加者とディスカッションをしています。坐禅のやり方に関しては会の初めに基本的な説明をしていますが、実際にやってみた後で出てくるであろう不明な点をできるだけはっきりさせておきたいということと、参加者同志の交流を図りたいというのが私の主なねらいです。ですから私が一方的に講義あるいは提唱をするというようなやり方ではなく、その時その場で出される質問やコメントを取り上げて私なりの応答を交えながら全員の議論に広げていったり、あるいは適当な書物からの短い引用を紹介してそれをもとにして討論を行ったりするというやり方をとっています。(これまでに用いた本としてはサンフランシスコ禅センターの創設者である鈴木俊隆老師のZen Mind Beginner's Mind、内山興正老師のOpening the Hand of Thought、ティク・ナット・ハン師のBeing Peaceなどがあります) その話し合いの司会、進行役をするのが私の主な役目で、最終的な結論よりもお互いの考えを交換する過程の方を大切にしています。時にはコメンテータ役もつとめますが。

よく話題になるトピックをいくつか列記してみます。結跏趺坐という姿勢はどれほど必須のものなのか。わざわざ痛い思いをして無理にその姿勢で坐る必要はないのではないか。痛みや身体的不快感にどう対処したらいいのか。どうしたら楽に坐れるようになるのか。思いが次から次に浮かんできて無念無想などには到底なれそうにないがどうしたらいいのか。坐ってそれから何をしたらいいのか。坐禅中に目を閉じてはいけなと言われたが自分は目を開けたままだと集中できないのだが……。坐



スミス大学坐禅会 ディスカッション

禅とそれ以外の日常生活をどうつなげていけばいいのか。社会の諸問題をほったらかしてこんな所でのんびり坐っていてもいいのだろうか。坐禅と慈悲の実践とはどう関係しているのか。悟りというのは一体どういう状態のことなのか。坐禅をしなければ悟れないのか。怒りや不安といった否定的な感情を仏教ではどうとらえるのか。空とは、無我とは何か、私は現にここにこうしているではないか。責任を担う主体を仏教は認めないのか、等々。

アメリカの人は分からないことは率直に質問します。正直言って「そんなこと聞いて恥ずかしくないの?」と思うような質問も時にはありますが、ディスカッションの時の活発さを私はとても心地よく感じています。自分自身がたいして深く考えていなかった重要な問題に改めて気づかせてもらったなと感謝することがしばしばです。同じような問いに対していろいろな違った角度から答えることができるように自分が鍛えられてきたように思います。自分の配役として坐禅会のリーダー役を務めさせてもらっていますが、私はあくまで一介の修行者にすぎませんから、いつも「私の言うことを鵜呑みにしないように。これはどこまでも私の見解であって、それをヒントにして後はご自分の頭と体を駆使して参究して行って下さい」と念を押しています。出来合いの究極的解答がどこかに転がっているとか、それを所有している誰かから教えてもらおうというような非仏教的な考え方や態度だけは身につけて欲しくないと思っています。(つづく)



マウントオーリヨーク大学 坐禅中



## ゆめ観音 in 大船



總持寺渡邊剛毅監院老師 開式法要

11月14日、鎌倉市の曹洞宗大船観音寺において、「第1回ゆめ観音in大船」国際交流会が開催された。

大船観音寺は、JR大船駅前に位置し、駅からも巨大な白衣観音像を望むことができる。最近では日本人の参詣客のみならず在日アジア各国人の参詣客が急増し、記帳ノートの書き込みも3割を超える現状を鑑み、東南アジア各国の母国語による法要や、舞踏などのイベント・バザー等が企画されたのが今回の交流会である。雲ひとつない晴天のもと、大本山總持寺監院・渡邊剛毅老師による開式法要の後、スリランカ・アグラスラワカ寺院、中国・天童山景德寺、韓国曹溪寺からの僧侶による法要に引き続き、ミャンマー、カンボジア、台湾、ネパールの各国の方々による祈りや舞踏が奉納された。国や政治信条、言葉の枠を越え、また大乘佛教、上座佛教が合同で交流会を開催し、盛大に円成したことは、非常に意義深いものであると思われる。

なお、この国際交流会には、大船観音寺からの要請により、SZI関係者として英語による法要解説、各国僧侶の送迎、来賓の案内・接客のために6名が参加した。(SZI事務局 亀野哲也)



大船観音

## ドイツ大悲山普門寺

堂頭 中川正壽

新年あけましておめでとうございます。新しい世紀を迎え、皆様方におかれましては益々ご清祥のことと拝察いたし、お慶びを申し上げます。

私共普門寺建設のための工事も、活動を行っていく上で必要最低限の部分は完了し、徐々に二期工事に取りかかってきております。別館に本堂が完成いたしましたので、以前使っておりました本館内の仮坐禅堂を取り壊しました。現在、基本改修工事の終わった別館セミナーハウスの内装工事を少しずつ進めております。しかしまだ雨漏りのある本館の屋根の修理等を、今後も引き続き進めていかなければなりません。本館内部の全面修理の費用など、資金繰りは相変わらずとても厳しい状況であり、引き続き各方面からのご賛同と資金の援助を仰いでおります。今後とも何卒一層、ご法愛ご指導を賜り、ご支援いただけますようお願いいたします。

ようやく当山も寺院としての体裁がある程度整って参りましたが、それに応じて、本来の活動である聞法参究と坐禅功夫にあてる時間を少しずつ増やせるようになって参りました。年間を通じて月の半分以上に接心等のコースを設けており、参加者も増加、定着しつつあります。

今年の9月には当山が主催し、ミュンヘン市文化センターと普門寺で行う宗祖道元禅師ご生誕800年慶讃の特別記念講演並びにシンポジウムを開催いたします。これを機として、今後は仏教センターだけでなく、大学等、様々な教育・研究機関とも積極的に交流し合い、布教の裾野を広げていく所存であります。

大悲山普門寺がここまで成長できたのは、ひとえに尊宿各位、並びに一般協力者の皆様方の物心両面にわたる惜しみないご支援の賜物であります。心より厚く感謝申し上げます。 仏暦2543年 元旦

日本寄付受付先：郵便局振替口座 ドイツ大悲山普門寺 00940-8-310590

## S Z I 動静報告

- 8月19日 会報編集会議 行田 興徳寺
- 9月 3日 宗務庁国際課と連絡会
- 9月27日 役員会議 東京グランドホテル
- 10月21日 北アメリカ スタンフォード大学「道元シンポジウム」へ
- ～26日 SZIスタディーツアーとして17名参加
- 11月13日 大船観音寺「ゆめ観音 IN 大船」にスタッフ6名協力  
会報編集会議
- 12月 5日 スタンフォード大学「道元シンポジウム」ツアー参加者写真交換会 銀座 クルーズクルーズ
- 12月 6日 役員会議 東京グランドホテル
- 12月10日 事務連絡会 大本山總持寺
- 12月15日 会報編集会議 新宿 天龍寺
- 12月19日 事務連絡会 大本山總持寺



## 寄付者・会費納入者名簿

## ■ S Z I 会費納入者

新規会員並びに会員ご継続  
ありがとうございました。  
(敬称略・順不同)  
1999年8月1日～12月31日まで

|           |      |       |
|-----------|------|-------|
| 青木俊享      | 太田市  | 岩松寺   |
| 天野宏雄      | 加美郡  | 皆伝寺   |
| 磯貝昌隆      | 文京区  | 喜運寺   |
| 市川智彬      | 横浜市  | 興禅寺   |
| 糸柳格順      | 藤枝市  | 洞雲寺   |
| 岩井恵澄      | 黒部市  | 東信庵   |
| 岩本英男      | 横浜市  |       |
| 鶴飼宏史      | 一宮市  | 禅林寺   |
| オーシャントラベル | 豊島区  |       |
| 大谷哲夫      | 新宿区  | 長泰寺   |
| 大八木春邦     | 鶴岡市  | 保春寺   |
| 岡本荘一      | 中野区  | 龍昌寺   |
| 金田諦典      | 栗原郡  | 通大寺   |
| 菊泉寺       | 名古屋市 |       |
| 来馬規雄      | 豊島区  | 高岩寺   |
| 来馬宗憲      | 豊島区  | 清巖寺   |
| 黒川浩治      | 板橋区  |       |
| 黒木 靖      | 江戸川区 |       |
| 高福寺       | 足利市  |       |
| 斉藤征良      | 行田市  | 神仙寺   |
| 佐久間顕一     | 京都市  |       |
| 佐瀬道淳      | 安来市  | 松源寺   |
| 佐藤公泰      | 杉並区  |       |
| 佐藤大英      | 墨田区  | 円通寺   |
| 柴田隆全      | 名古屋市 | 神蔵寺   |
| 俊朝寺       | 港区   |       |
| 瑞雲院       | 矢板市  |       |
| 菅原昭英      | 狛江市  | 泉龍寺   |
| 鈴木昭一      | 周智郡  | 西光寺   |
| 鈴木道雄      | 南秋田郡 | 自性院   |
| 鈴木包一      | 焼津市  | 林叟院   |
| 鈴木恵美子     | 横浜市  | 第七応機塾 |

|           |      |      |
|-----------|------|------|
| 高橋秀雄      | 北埼玉郡 | 広徳寺  |
| 田中一稔      | 和光市  | 壹鑑寺  |
| 田中芳周      | 杉並区  | 観泉寺  |
| 多羅尾道春     | 埴科郡  | 耕雲寺  |
| つばた書店     | 福井市  |      |
| 出川成海      | 横浜市  |      |
| 洞雲寺       | 相馬市  |      |
| 洞外文隆      | 三浦市  | 本瑞寺  |
| 尖秀雄       | 足柄下郡 | 吉祥院  |
| 析掘真英・久子   | 平塚市  | 浄心寺  |
| 永井成典      | 知多郡  | 宝珠寺  |
| 仲井章史      | 板橋区  | 増福寺  |
| 中野東禅      | 横浜市  |      |
| 檜崎通元      | 新居浜市 | 瑞応寺  |
| 西沢宏道      | 新宿区  | 宗参寺  |
| J T B 営業部 | 営業一部 |      |
| 橋本英樹      | 熊谷市  | 見性院  |
| 蓮池泰乗      | 鶴岡市  | 宗伝寺  |
| 長谷川明雄     | 太田市  | 瑞岩寺  |
| 長谷川俊峰     | 西白河郡 | 常在院  |
| 原田道一      | 大野郡  | 正宗寺  |
| 原山浩昭      | 上水内郡 | 苔翁寺  |
| 平子興正      | 安中市  | 桂昌寺  |
| 福壽院       | 千葉市  |      |
| 藤木総宣      | 世田谷区 | 仏教企画 |
| 宝持寺       | 鴻巣市  |      |
| 松本誠諦      | 富山市  | 自得寺  |
| 松本力也      | 千葉市  | 海蔵寺  |
| 三浦桂苗      | 秦野市  | 喜叟寺  |

|      |      |       |
|------|------|-------|
| 水町宗典 | 佐世保市 | 青眼寺   |
| 皆川広義 | 鹿沼市  | 常真寺   |
| 宮澤俊弘 | 松本市  | 正麟寺   |
| 村上泰賢 | 群馬郡  | 東善寺   |
| 森 嶺雄 | 所沢市  | 松林寺   |
| 安江英雄 | 名古屋市 | (株)安江 |
| 山崎季晟 | 三島市  | 宗徳院   |
| 山田栄一 | 日立市  | 鏡徳寺   |
| 山田茂雄 | 横浜市  |       |
| 嶺雲寺  | 行田市  |       |
| 渡辺亮正 | 海部郡  | 一心寺   |

## ■ S Z I 特別寄付

(会費分を除く、敬称略・順不同)  
1999年8月1日～12月31日まで

|       |     |     |
|-------|-----|-----|
| 洞外文隆  | 三浦市 | 本瑞寺 |
| 橋本英樹  | 熊谷市 | 見性院 |
| 続道雄   | 台東区 | 玉宗寺 |
| 青木俊享  | 群馬県 | 岩松寺 |
| 佐瀬道淳  | 安来市 | 松源寺 |
| 鶴飼宏史  | 一宮市 | 禅林寺 |
| 大木昭   | 金沢区 |     |
| 富井清孝  | 十日町 |     |
| 来馬規雄  |     | 高岩寺 |
| 三浦桂苗  | 秦野市 | 喜叟寺 |
| 大船観音寺 |     |     |
| 藤川享胤  | 鶴岡市 | 船若寺 |

## 会報15号のお詫びと訂正

会報15号の人名記載に誤りがありました。訂正については以下の通りです。謹んでお詫び申し上げます。

|      |        |          |
|------|--------|----------|
| 1 頁  | (誤) 荻野 | → (正) 萩野 |
| 9 頁  | (誤) 黒沢 | → (正) 黒柳 |
| 12 頁 | (誤) 松本 | → (正) 松永 |

## 皆様のホームページ運営中!

SZIホームページでは、活動報告の他、皆様との交流の場を設けています。  
SZI.BBS (掲示板) へのご意見・ご質問をスタッフ一同お待ち申し上げます。

<http://www.pa.airnet.ne.jp/szi/>